

学 位 論 文 審 査 の 要 旨

| | |
|---------|---|
| 論文提出者 | 佐野祥美 |
| 論文審査委員 | (主査) 朝日大学歯学部教授 飯沼光生 (副査) 朝日大学歯学部教授 滝川俊也 (副査) 朝日大学歯学部教授 村松泰徳 |
| 論文題目 | 口唇口蓋裂児の口唇形成による口腔周囲筋活動の変化と筋協調パターンの特徴 |
| 論文審査の要旨 | <p><u>論文審査の要旨</u></p> <p>口唇口蓋裂は顎顔面領域では最も発現頻度の高い裂奇形で、臨床の場において口唇口蓋裂患者を診る機会は少なくない。また、口唇口蓋裂治療の評価は形態的評価が圧倒的に多く、機能的評価は構音評価にとどまっているのが現状である。</p> <p>そこで本論文は、口唇口蓋裂児における吸啜運動の特徴と、口唇形成術前後および術後3か月時における口腔周囲筋活動の筋協調パターンの変化について検討することを目的に、筋電図積分値移動曲線を用いて解析を行っている。</p> <p>被検児は、藤田保健衛生大学病院口唇口蓋裂センターで口唇形成術を施した片側性完全唇顎口蓋裂児（以下 CLP）を対象に、口唇形成術前、術後、3か月後の計3回、哺乳床を装着した状態で有弁型人工乳首を用いて授乳を行なわせ、口腔周囲筋活動を計測している。なお、被検児と同様の人工乳首を使用している全身および口腔内に異常を認めない健常乳児（以下 健常児）をコントロールとしている。その他、詳細な計測方法は内容要旨のとおりである。</p> <p>その結果、1吸啜サイクル時間は、各計測時期とも健常児群より有意に短かったが、CLP 群では口唇形成術前、術後、3か月後で差はみられなかったという。ピーク時筋活動量は、OM では術後は健常児群および CLP 群の術前より有意に大きい値を示し、3か月後においても増大傾向がみられたが、SM では、各計測時期とも健常児群より有意に小さい値を示したという。しかし、TM と MM では4群間に差はみられなかったという。また、ピーク時間を1吸啜サイクル中における割合で見ると、SM では、各計測時期とも CLP 群のピーク位置は1吸啜サイクルの中盤にあり、健常児群と比較して有意差に前方に位置していたが、TM、MM、OM では、健常児群と CLP 群で差はみられず、これらのことが、筋電図積分値移動曲線により視覚的にも明瞭になったという。</p> <p>以上より、口唇口蓋裂児は健常児よりも1吸啜サイクル時間が短く、口輪筋の活動が大きいことを明らかにし、舌骨上筋群の活動は小さく、ピークが中盤に位置していたことから、健常児とは異なった筋協調パターンで吸啜運動を行っていることを示唆する結論を得ている。</p> <p>審査委員は、本論文が口唇口蓋裂児における口唇形成術前後の吸啜運動の機能的特徴の一端を筋電図学的に明らかにしたことを高く評価し、学位(歯学)に値するものと評価した。</p> |